

研究への出発を支援する

学校臨床心理専攻・渡邊弘純

1. 授業の目的と概観

平成21年度の受講者は12名であった。

心理学における研究方法について具体的に理解し、教育現場や教育臨床の場で、実際に多様な研究展開が可能になる力量の基盤をつくること、これを通じて、受講者各自の研究展開の出発を支援することが、この授業の目的であった。

研究への出発を準備するために、まず最初、受講者各自の問題意識を絞り込み、日本語と英語で、5つのキーワードを表現するよう求めた。次いで、日本語と英語の雑誌論文のデータベースを紹介し、文献検索の実際について教示した。この上で、受講者各自の研究のキーワードに基づき、日本語と英語の各5つ雑誌論文を見つける文献検索の実習を行った。そして、文献表記について教示した後、検索した文献リストを、表記法に従って作成し、提出させた。これらの多くは、宿題として課し、適宜授業外で個別的にも教示した。

次に、Creswell 著／操・森岡訳『研究デザイナー質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会をテキストにして、各章を、各回2名ずつの報告者をたて、30分報告、30分討論、30分教員からの助言という授業形態で、14回行った。その内容は、デザインの枠組み／文献レビュー／執筆戦略と倫理的配慮／序論／目的の言明／研究上の問いと仮説／理論の活用／定義・限界・意義／量的研究法の手順／質的研究の手順／ミックス法の手順であった。しかし、受講者の理解が十分でない点を考慮し、別の資料を配付して、測定と信頼性・妥当性／独立変数と従属変数／質問紙調査の方法を追加した。

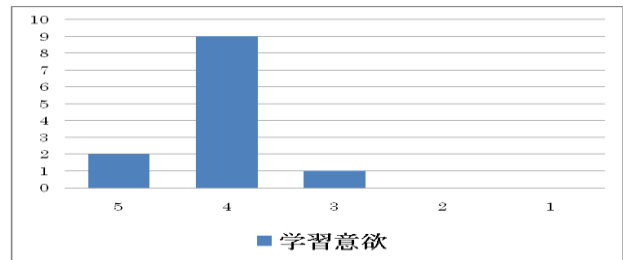
受講者は、授業に熱心に取り組み、時間的制約から、受講者が全ての実習課題を行い、実践的に身につけるという点には不十分さを残したが、所期の目的は概ね達成されたと考えられた。

2. 学生による授業への量的評価

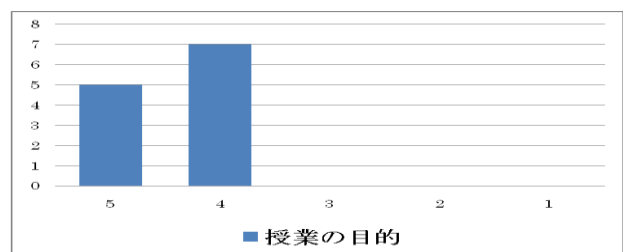
7つの設問を行い、5. 強くそう思う、4. ややそう思う、3. どちらともいえない、2. あまりそう思わない、1. 全くそう思わない、の5件法で回答を求めた。

<問1>あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか。

図に示されるように、多くが4と回答しており、それなりに意欲的であることがわかる。

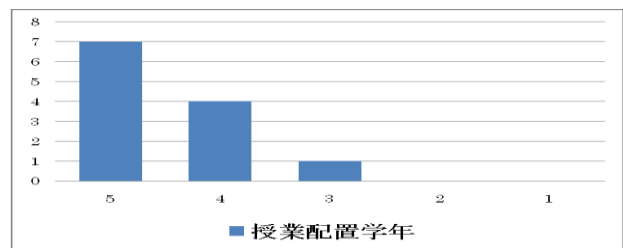


<問2>授業の目的は、授業展開のなかで明確でしたか。



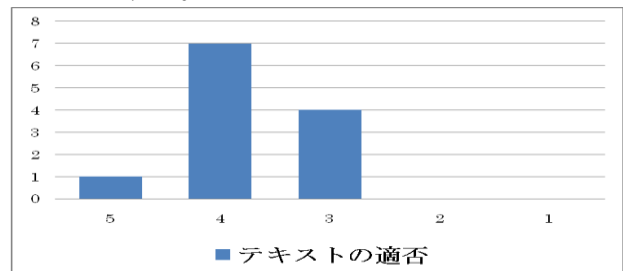
3以下がなく、5も多いことは、授業の目的がかなり明確であったことを示していた。

<問3>1回生前後に「心理学研究法特論」を置くのは良いことだと思いますか。



5が多く、授業開設学年が適切であることを示していた。3の1名が気になるところである。

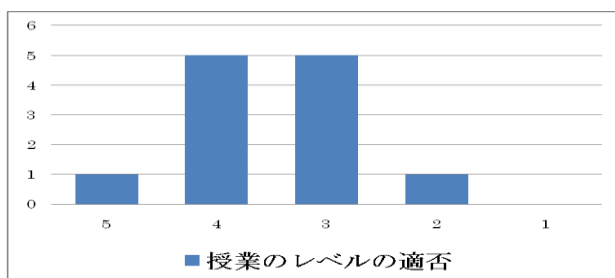
<問4>テキスト「研究デザイン」は適切だったと思いますか。



4が多く、一応適切だったと考えられる。しかしながら、2以下はないが、3が4名あった。このテキストが、米国で、博士論文準備のための授業用テキストであり、かなり多くの演習課題を含んでいるところから、このような回答が生まれたと考えられる。自由記述の回答には、難しいテキ

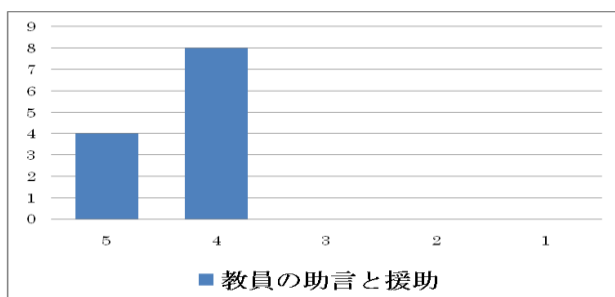
ストだとの記述も多数認められた。したがって、多くの時間を取り、実習しながら研究法をマスターする方略が好ましいと思われる。

〈問5〉授業の内容やレベルは、あなたにとって適切でしたか。



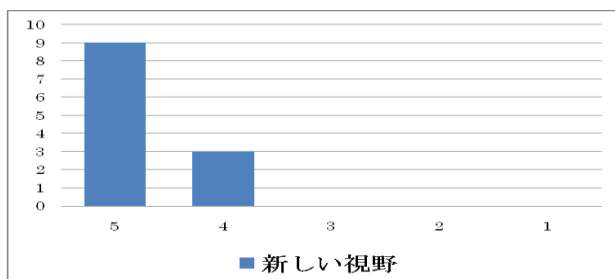
前問とも関連するが、自由記述を参照すると、レベルが高すぎて、難しいという評価も認められた。5がある一方で、2の回答もあった。実習と併行して進める必要があるかもしれない。

〈問6〉担当教員の授業中の助言や援助は適切でしたか。



4と5の回答が全てであり、助言や指導が概ね適切であったことが示されている。

〈問7〉この授業によって、自分の考え方がつちかわれたり、新しい視野が開かれたりしたところがありましたか。



自分の考え方を培ったり、新しい視野を拓くことは、授業において、最も重要なことだと考えていた。ここでは、3以下の回答が無く、大多数が5であったということは、この授業の目的が、ほぼ達成されたことを示している。多少難解なテキストであったり、レベルが高かったとしても、受講者を「ほんもの」に直接ぶつけることの意義を示していると考えられる。

3. 学生による授業への質的評価

自由記述によって、〈この授業で学んだ最も印象的なこと〉〈もっと深く学びたかったこと〉〈この授業の良かった点〉〈この授業の改善すべき点〉について質問し回答を求めた。

1. 全体を通して、データベースを紹介し、自己の研究関心のある問題についての文献検索を、実習を通して学ぶやり方は、好評であった。ただ、文献記載の方法については、完全な水準になかなか到達しなかったこともあり、時間のかけ過ぎではないか、との指摘もあった。

2. 最も印象的なことについて

「このデザインという考え方自体が新鮮で、修士論文をどのように書けば良いか悩んでいた私にとって、とてもありがたかったです」との回答があった。また、「量的、質的、ミックス法という研究方法があるという当たり前のことですが、これまでの経験にない考え方でした」など、多様な研究方法を、全体のなかに位置づけてとらえることが、印象的であるとの回答が多かった。「各研究方法によって、目的や仮説、分析方法などが違うということも知り・・・」、「自分の研究方法（質的研究）以外のものが、よく分かりました」との回答もあった。

3. もっと深く学びたかったことはどんなことか。

特に質的研究について、特定の技法が実施できるレベルで学びたかった、との回答が見られた。たとえば、「エスノグラフィーについて詳しく学びたかった」など。また、修士論文の具体的な書き方を学びたかったという要請やここで取り上げたレベルの基礎を学びたかったという要望もあった。

4. この授業の良かった点について

テキストが難しいとの論評の一方で、「テキストは難しかったです、後で繰り返し読むことで研究を進めていく参考となりました」などの評価があった。今まで不明確な点の理解が進み、深化したとか、教員の解説やコメントの評価もあった。

5. この授業の改善すべき点について

みんなで議論を深める話し合いの仕方、実際に実習する時間が欲しかったなどの要望があった。

4. まとめ

全体を通じて、この授業が受講生の研究への出発にあたって、肯定的な役割を果たしたと考えられる。今後の課題としては、各研究方法それぞれについて、実習しながら、疑問を解決し、手法を身につけていくことが挙げられる。このためには、現在の時間の2倍から3倍の時間が必要である。この改善のためには、カリキュラム全体の再構成が必要となる。あるいは、個々の教員が開講している課題研究に委ねることで解決されるとも言える。